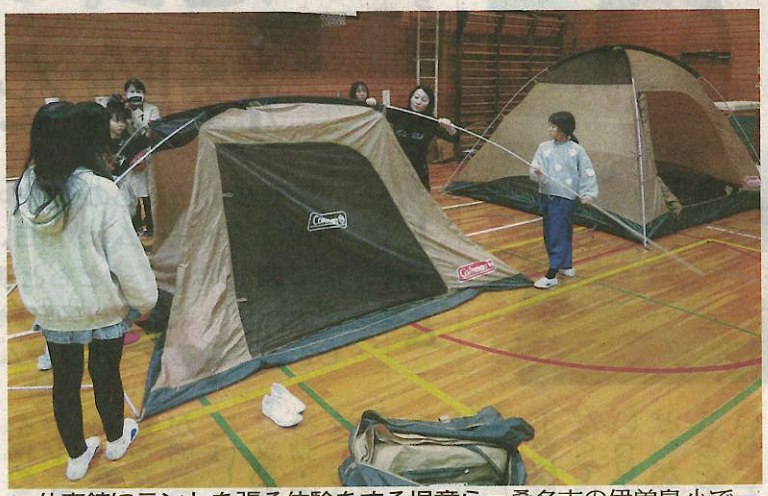
体育館でキャンプ 防災を実践

桑名・伊曽島小5年生 防寒方法など学ぶ



体育館にテントを張る体験をする児童ら＝桑名市の伊曽島小で

学校の体育館に子どもたちが宿泊する防災キャンプが13日、桑名市の伊曽島小学校で1泊2日の日程で始まった。これまで少年自然の家で行ってきた夏のキャンプを学校での防災キャンプに初めて切り替え、日本防災キャンプアウトドア協会（長野県須坂市）の協力で実施した。

参加したのは同小5年生33人。同協会代表理事の山崎晶之さんらの話を聴いた。山崎さんは命を守る五つの要素として「空気、体温、水、火、食料」を紹介。「体温が奪われる状態が3時間続けば命に関わる。災害時はぬれない、風に当たらない、温度の低いものに触れないという3点に気を付けて」と語った。

体育館では体温を保持することを意識したテントの設営などを体験。床から体温が奪われるのを防ぐため、段ボールを敷くことや寝袋で暖かく寝る方法などを習った。夕食は家庭科室でカレーを調理し、朝食はお湯だけできのこご飯やわかめご飯が食べられる防災食を味わう。簡易トイレの使い方、ロープワーク、火起こしなども学ぶ。

各地で防災キャンプを実施している山崎さんは「実は学校の体育館が寒いことなど、子どもたちは多くのことを体感すると思う。実践的な防災キャンプからたくさん学んでほしい」と話した。

長島地区にある伊曽島小は津波などの浸水域内にあるため、南海トラフ地震や台風などでは避難所として使わない方針。住民は高台の大山田地区などに広域避難することになっており、どこでも役立つ防災知識を子どもたちに教えるために学校が企画した。（大島康介）